中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第21号（2020）89－96

実 践 報 告

老年看護学実習における看護学生の認知症に対するイメージの変化

How the Perceptions of Dementia among Nursing Students Have Been Improved through Geriatric Nursing Practice

松 田 武 美[1)]・前原美奈子[1)]・安 藤 純 子[2)]・榎 本 敬 子[1)]・瓜 巣 敦 子[1)]
Takemi MATSUDA, Minako MAEHARA, Junko ANDO,
Keiko ENOMOTO, and Atsuko URISU

抄録：認知症高齢者数は、2012年で462万人、65歳以上の高齢者の７人に１人と推計される。本研究の目的は、看護系大学看護学生の老年看護学実習前後の認知症高齢者のイメージの変化について確認し老年看護学実習での学修の効果を明らかにすることである。方法は、看護学生に対して臨地実習前後のイメージの変化などについて無記名自記式質問紙調査を行った。その結果、実習終了後の認知症高齢者のイメージは、男女合わせて約七割の学生に変化がみられ、『個別性』、『記憶の変化』、『可能な会話』、『認知症の理解』について記述があった。臨地実習で認知症高齢者の方と関わりコミュニケーションをとることで相手の生活歴などを学び、一人一人の症状が違いや個別性を理解することの大切さも学修していた。このことは、認知症高齢者との関わりが少ない学生にとって臨地実習で認知症高齢者と関わることでの成果であった。

キーワード：看護学生・認知症・高齢者・イメージ

Ⅰ．はじめに

日本の高齢化率は､世界で最も高い水準となっている。その中で認知症高齢者数は、2012年で462万人、65歳以上の高齢者の７人に１人と推計される。正常と認知症との中間の状態の軽度認知障害（MCI：mild cognitive impairment）と推計される約400万人とあわせると、高齢者の約４人に１人が認知症の予備群ともいわれている。さらに厚生労働省は、2025 年には全国で認知症の高齢者数が700万人を超えると予測している（内閣府，2016）。

高齢化率の上昇に伴う人口の構成は、平成２年以降、年少人口（15歳未満）および生産年齢人口（15～64歳）の割合の低下、老年人口（65歳位以上）の割合の増加から高齢化の傾向が続いている（厚生労働統計協会，2018）。そして、核家族化など単独世帯の増加、夫婦と未婚の子のみの世帯および三世代同居世帯の減少という状況がある。このような現状の中、看護学生にとって日常生活の内での高齢者との関わりが少なく、さらに認知症の高齢者との関わりも少ないことは容易に想定できる。

最近の看護学生に対しての認知症高齢者についての研究動向をみると、認知症ケアの授業前後高齢者のイメージの変化（木下，2016）や老年看護学学習過程における認知症高齢者のイメージの変化（草地ら，2007）では、学習や実習を経験するに従い認知症高齢者像が肯定的に変化していた。更に認知症高齢者の中核症状に対するイメージ（藤原ら，2018）の研究では、実習前の３年生と実習終了している４年生に対する調査から実習終了後４年生の方が認知症高齢者の中核症状（記銘力障害、見当識障害、理解判断力障害）に対する理解度が高く、認知症高齢者の中核症状に対するイメージと BPSD（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia）への対応に知識が結びついていた。同様に看護学生の認知症高齢者の臨地実習前後のイメージの変化（炭多ら，2017）においても３年生と実習終了後の４年生を対象にして認知症高齢者の BPSD のイメージの違いについて調査していた。結果は臨地実習後の４年生の方がイメージと知識が定着していた。看護学生にとって臨地実習体験による認知症に対するイメージの変化は、肯定的な傾向に変化していた。

今後の認知症ケアは、介護福祉施設や一般病院において必要かつ重要と考える。看護学生が認知症高齢者と関わる機会としては、福祉施設や病院での臨地実習体験である。臨地実習での学びは、認知症高齢者への看護の質

１）看護リハビリテーション学部看護学科　　２）人間環境大学看護学部

の向上のきっかけになり、どのように学び、何が課題なのかを確認していくことが求められている。看護学生が看護基礎教育において、知識・技術の実践を学んでいるが、その知識を基に臨地実習の中でどのように学びをつなげていくかは、重要な課題である。

看護大学の老年看護学における臨地実習は、老人保健施設、老人福祉施設、病院で看護実践から学ぶための臨地実習を行っている。そこで今回、老年看護学実習で認知症高齢者と関わることでイメージがどのように変化したかを把握し、老年看護学実習での学びを検討する必要がある。

Ⅱ．目的

看護学生の老年看護学臨地実習前後の認知症高齢者のイメージの変化について確認し老年看護学臨地実習での学修の効果を明らかにすることである。

Ⅲ．研究方法

1．対象者

研究対象は、A大学の看護学部３年生に在籍している老年看護学実習を実施した看護学生69名。

2．研究期間

2017年５月～12月

3．研究方法

調査方法は、老年看護学臨地実習の受講学生に対しての無記名自記式質問紙調査である。臨地実習開始前の３年生に対して研究の目的、目標を説明し、自記式質問用紙を手渡した。自記式質問用紙は、臨地実習開始前に配布して各自で保管し、臨地実習終了後に大学事務所内の鍵付きの回収箱に投函するように依頼した。

調査内容は、対象学生の性別、年齢、高齢者との同居経験、臨地実習前の認知症高齢者との関わり、臨地実習終了前後の認知症高齢者へのイメージの変化について調査を行った。

臨地実習前の認知症高齢者との関わりは、「全くない」「あまりない」「時々あった」「よくあった」の４件法で行い、臨地実習終了後のイメージの変化は、「全く変わらない」「あまり変わらない」「少し変わった」「大変変わった」の４件法で確認した。また認知症高齢者の臨地実習前後イメージの変化については、自由記述で記入することとした。

4．学習過程の概要

A大学の学習過程は、１年生から人体の構造と機能の学習をして１年後期から看護系科目の概論を受講している。老年看護学領域では、老年看護学概論が始まっている。２年生では、看護系科目の臨床看護論を習得し、後期に基礎看護学実習を習得し、３年生に進級し各論実習である老年臨床看護学実習を受けている。

A大学の老年看護学臨地実習は、180時間４単位の実習であり、期間は５月～12月である。具体的には、３年生１グループ３～４人のグループに分かれ、医療保健系の施設（病院など）で３週間、福祉系の施設（老人保健施設・老人福祉施設）で１週間の臨地実習を行っている。老年看護学実習の目的の中に認知症高齢者の理解に関する項目は、『認知症高齢者のケアを通して生活機能の向上に関わるケアの内容とかかわりの重要性を理解することができる』とある。

＜臨地実習目的＞

加齢変化や疾病に伴う日常生活障害のある高齢者とその家族に対して、対象の持てる力が最大限に発揮されるよう、看護過程の展開を実践する。

＜臨地実習目標＞

臨地実習目標は、６項目を学生に示している。

1）人生の最終ステージにある、健康・機能障害を持つ高齢者の特徴を理解することができる。
2）健康・機能障害を持つ高齢者と家族に個別性のある看護過程を展開できる。
3）高齢者の健康障害の特徴を踏まえて対象と家族に応じた援助ができる。
4）保健・医療・福祉に携わる職種が協働し連携していくことの重要性を理解できる。
5）認知症高齢者のケアを通して生活機能の向上に関わるケアの内容とかかわりの重要性を理解することができる。
6）高齢者の看護からその人らしさを理解し、老年観・看護観を培い、自己の役割を認識し行動することができる。

5．用語の定義

イメージとは、広辞苑では、心の中に思い浮かべる像（新村出，2008）。全体的な印象とされており、大辞泉では、ある物事についていだく全体的な感じ。形象と書かれている（村松明，1995）。本研究では、イメージとは心の中に思い浮かべる像として使用する。

6．分析

分析は、高齢者との同居経験、臨地実習開始前の認知症高齢者との関わり、臨地実習終了後の認知症高齢者へのイメージの変化について単純集計を行い、臨地実習終了後の認知症高齢者へのイメージの変化と高齢者との同居経験、認知症高齢者との関わりについて、Peason の χ^2 検定を行った。統計解析には、統計パッケージ IBM SPSS Statistics 23 を用いた。データは、小数点以下第二位を四捨五入した。

自由記述のデータは、アンケートに記述されている内

容の類似性に基づきKJ法で分類、カテゴリー化した。カテゴリー化するにあたっては、老年看護学に関係する３名の教員で確認した。

７．倫理的配慮

中部学院大学中部学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号　E17-0003）。

調査対象の学生に対しては、臨地実習開始前に研究の目的と方法、研究の参加は自由であり、参加不参加による不利益はないこと、調査は無記名で行い個人が特定されないようにして分析を行うことなどを口頭と書面で説明して同意書を得た。

Ⅳ．結果

１．対象者の属性

研究協力者は、Ａ大学３年生39名（回収率56.5％）であった。対象の属性については、表１に示した。性別は、女性31名（79.5％）、男性８名（20.5％）であった。調査対象者は、女性が約８割弱を占めていた。

高齢者との同居経験は、「現在も同居している」11名（28.2％）、「過去に同居していた」10名（25.6％）、「同居経験ない」18名（46.2％）であった。このことから約半数の学生が高齢者との同居を経験していないことが分かった。

臨地実習前の認知症高齢者との関わりは、「全くない」12名（30.8％）、「あまりない」14名（35.9％）、「時々あった」４名（10.3％）、「よくあった」９名（23.1％）であった。その中で、認知症高齢者とかかわりのあった学生の10人が祖父母に認知症がいた。その他の高齢者との関わりが「全くない」「あまりない」の学生が26名（66.7％）と約７割弱の学生がいた。

臨地実習終了後の認知症高齢者へのイメージの変化は、「まったく変わらない」２名（5.1％）、「あまり変わらない」11名（28.2％）、「少し変わった」19名（48.7％）、「大変変わった」７名（17.9％）であった。「少し変わった」「大変変わった」の学生が26名（66.6％）と約７割の学生がいた。

２．性別から見た同居経験と認知症高齢者の関わり

性別と対象者の属性について表２に示した。性別と高齢者との同居経験の有無については、「現在も同居している」女性11名（28.2％）、男性０名（0.0％）、「過去に同居していた」女性６名（15.4％）、男性４名10.3％）、「同居経験ない」女性14名（35.9％）、男性４名（10.3％）であり、「現在も同居している」学生は、女性の方が多かった。男性は逆に高齢者と「過去に同居」、「同居経験ない」学生が半数ずつであった。

臨地実習前の性別と認知症高齢者との関わりの有無は、「全くない」女性11名（28.2％）、男性１名（2.6％）、「あまりない」女性９名（23.1％）、男性５名（12.8％）、「時々あった」女性４名（10.3％）、男性０名（０％）、「よくあった」女性７名（17.9％）、男性２名（5.1％）であった。「全くない」「あまりない」学生が男性は８名中６名（75％）と多く見られ、高齢者とのかかわりが少ない傾向がみられ、女性は、31名中20名（64.5％）と多かった。

臨地実習終了後の男女別認知症高齢者へのイメージの変化では、「全く変わらない」女性２名（5.1％）、男性０名（0.0％）、「あまり変わらない」女性８名（20.5％）、男性３名（7.7％）、「少しかわった」女性15名（38.5％）、男性４名（10.3％）、「大変変わった」女性６名（15.4％）、男性の１名（2.6％）であった。「少し変わった」「大変変わった」学生が、女性は31名中21名（67.7％）と多く見られ、認知症高齢者のイメージの変化があった学生は、男女合わせて39人中26名（66.7％）と多かった。

表１　対象者の属性

項　目		人数 n＝39
性別	男性	8(20.5)
	女性	31(79.5)
同居経験	現在同居	11(28.2)
	過去に同居	10(25.6)
	同居経験ない	18(46.2)
認知症高齢者との関わり	全くない	12(30.8)
	あまりない	14(35.9)
	時々あった	4(10.3)
	よくあった	9(23.1)
イメージの変化	全く変わらない	2(5.1)
	あまり変わらない	11(28.2)
	少し変わった	19(48.7)
	大変変わった	7(17.9)

（　）内は％

表２　性別から見た同居経験、認知症高齢者との関わり

項　目		人数 n＝39	
		男性	女性
同居経験	現在同居	0(0.0)	11(28.2)
	過去に同居	4(10.3)	6(15.4)
	同居経験ない	4(10.3)	14(35.9)
認知症高齢者との関わり	全くない	1(2.6)	11(28.2)
	あまりない	5(12.8)	9(23.1)
	時々あった	0(0.0)	4(10.3)
	よくあった	2(5.1)	7(17.9)
イメージの変化	全く変わらない	0(0.0)	2(5.1)
	あまり変わらない	3(7.7)	8(20.5)
	少し変わった	4(10.3)	15(38.5)
	大変変わった	1(2.6)	6(15.4)

（　）内は％

3．認知症高齢者へのイメージ変化と同居経験、認知症高齢者の関わり

臨地実習終了後の認知症高齢者のイメージの変化と同居経験、認知症高齢者との関わりの有無との関係について表３に示した。臨地実習終了後の認知症高齢者の認知症高齢者に対して「イメージの変化があった」学生は26名（66.7%）であり、そのうち「高齢者との同居経験がある」学生は、16名（41.0%）、「高齢者との同居経験がない」学生は、10名（25.6%）であった。

認知症高齢者への「イメージの変化がなかった」学生は13名（33.3%）であり、そのうち「高齢者との同居経験がある」学生は５名（12.8%）、「高齢者との同居経験がない」学生は８名（20.5%）であった。臨地実習終了後の認知症高齢者へのイメージの変化と同居経験についてのχ^2検定を行った結果、有意差はなかった。

臨地実習終了後の認知症高齢者のイメージの変化と認知症高齢者との関わりとの関係については、認知症高齢者に対しての「イメージの変化があった」学生は26名（66.6%）であり、臨地実習前に認知症高齢者との「関わりがあった」学生は９名（23.0%）、認知症高齢者との「関わりがなかった」学生は17名（43.6%）であった。認知症高齢者に対して「イメージの変化がなかった」学生が13名（33.3%）であり、そのうち臨地実習前に認知症高齢者との「関わりがあった」学生が４名（10.3%）、認知症高齢者との「関わりがなかった」学生は９名（23.0%）であった。

認知症高齢者へのイメージの変化と認知症高齢者との関わりの有無についてのχ^2検定を行った結果、有意差はなかった。

表３　認知症高齢者へのイメージ変化と同居経験、認知症高齢者との関わり

項　目		認知症高齢者のイメージの変化	
		あり	なし
同居経験	あり	16(41.0)	5(12.8)
	ない	10(25.6)	8(20.5)
高齢者との関わり	あり	9(23.0)	4(10.3)
	なし	17(43.6)	9(23.0)

（　）内は%

4．臨地実習前・後の認知症高齢者のイメージ

Ａ大学の看護学部学生の39名から回答があった自由記述項目について、質的な分析方法であるKJ法を使用し意味内容の類似性に基づき分類化した。記載内容は、カテゴリー【　】、サブカテゴリー『　』、コード「　」で示す。

１）臨地実習前の認知症高齢者のイメージ

臨地実習前の認知症高齢者のイメージの記述については、表５に示した。臨地実習前の認知症高齢者のイメージの学生の記述内容からの３個のカテゴリーが生成され、７つのサブカテゴリーに分類して95個のコードとして示した。

臨地実習前の認知症高齢者に対するイメージは、【観察できる現状】【精神的不安定】【家族介護】大きく３個に分類された。【観察できる現状】については、『物忘れ』『徘徊』『繰り返し』『困難なコミュニケーション』との認知症代表的な観察できる症状が記録されていた。

【精神的不安定】は、「意味不明な行動」や「怒りやすい」など認知症の不安定な『症状』と『行動』として構成した。さらに学生は、「介護が大変」と『家族の介護負担』を感じ【家族介護】についての大変さを示していた。

２）臨地実習終了後の認知症高齢者のイメージ

臨地実習終了後の学生の記述については、表６に示した。臨地実習終了後の認知症高齢者のイメージの学生の記述内容から認知症のイメージは、２個のカテゴリーに分類し６個のサブカテゴリーとなり55個のコードとして示した。

臨地実習後の認知症高齢者のイメージは、実習により【認知症高齢者のイメージの変化があった】【認知症高齢者へのイメージの変化がなかった】と分類した。【認知症高齢者のイメージの変化があった】では、『個別性』『記憶の変化』『可能な会話』『認知症の理解』と分類した。認知症高齢者と関わることにより「認知症高齢者の一人一人の違い」や「昔のことは良く覚えている」など気が付き学んでいた。【認知症高齢者へのイメージの変化がなかった】と答えた学生は、認知症に対して『変化がない』と答えてはいるがその中での『症状の気づき』をしていた。

３）臨地実習終了後のイメージ変化と同居の有無との関係

臨地実習終了後のイメージ変化と同居の有無との関係については、表６に示した。表６の結果を表４にまとめた。認知症高齢者へのイメージの変化があり、同居経験ある学生の一番多いサブカテゴリーは、『個別性』『認知症の理解』ともにコード数11個であり、『可能な会話』コード数８個、『記憶の変化』コード数１個であった。認知症高齢者へのイメージの変化があり、同居経験ない

表４　臨地実習終了後のイメージ変化のコード数と同居の有無との関係

	サブカテゴリー	同居経験の人数	
		あり	なし
		n=21	n=18
イメージの変化があった　n=26	個別性	11	5
	記憶の変化	1	3
	可能な会話	8	5
	認知症の理解	11	2
イメージの変化がなかった　n=13	変化がない	2	1
	症状の気づき	1	5

同一人物複数回答有り

学生の多かったサブカテゴリーは、『個別性』『可能な会話』ともにコード数５個であり、『記憶の変化』コード数３個、『認知症の理解』コード数２個であった。

認知症高齢者へのイメージの変化がなく、同居経験がある学生の多かったサブカテゴリーは、『変化がない』コード数は２個であり、『症状の気づき』コード数１個であった。認知症高齢者へのイメージの変化がなく、同居経験がない学生の多かったサブカテゴリーは、『症状の気づき』コード数５個であり、『変化がない』コード数１個であった。

Ⅴ．考察

老年看護学臨地実習の看護学生に対して実習前後の認知症のイメージの変化について自記式質問紙調査を行い確認した。さらに臨地実習前の認知症高齢者へのイメージと臨地実習後のイメージの変化について自由記述で確認した。

１．対象看護学生の属性

Ａ大学での高齢者との同居経験の状態は、「現在も同居している」11名（28％）見られている。平成28年高齢者白書によれば、３世代世帯は全国的に減少して13.2％になっている。このことから、都会ではないＡ大学の設置環境による同居世帯数が関連していると考えられる。同居世帯数を県別にみると他県と比べて同居率が高いほうであった（平成28年高齢社会白書）。

このことから、老年看護学を担当する教員としては、学生の生活背景を把握し教育に生かす必要があると考える。

２．臨地実習前の学生の認知症高齢者のイメージ

臨地実習前の認知症高齢者との関わりの有無では、「全くない」「あまりない」を合わせると66.7％と約７割弱の学生が認知症高齢者と関わったことがなかった。他大学の臨地実習前の高齢者と関わる機会については、「ほとんどなかった」43.8％であった（高橋ら，2016）。他大学と比べるとＡ大学の看護学生は臨地実習前に認知症高齢者と関わる機会が少ないことが理解できる。

臨地実習前の認知症高齢者のイメージは、「物忘れ」「徘徊」「繰り返し」「コミュニケーンの取りづらさ」など教科書で学習した内容からのイメージで捉えていた。認知症を理解するためには、臨地実習で教科書に書いてある認知症のBPSDの知識とつなげ、マイナスのイメージだけではなく、生活者として生活している認知症高齢者の実際を臨地実習の現場で関わり学ぶことが必要である。

３．老年看護学臨地実習終了後のイメージの変化と同居経験との関係

看護学生は、臨地実習で認知症高齢者の方とのかかわりを行なった結果、「認知症高齢者のイメージの変化があった」が26名（66.7％）であった。その中で、同居経験がある学生の実習終了後の変化が一番多く、16名（41.0％）であった。学生の言葉から「アプローチの仕方を変えることだけで様々な話をすることができた」や「実習で毎日関わることでの変化」、「認知症にも程度の差があり、暴力的な人もいればそうでない人もいる」ことなど接することにより学んでいた。先行研究では、看護学生の同居経験の有無による高齢者のイメージの変化について、実習終了後の看護学生の高齢者のイメージに同居経験からの影響がみられなかった（藤巻ら，2008）。本研究も、先行研究と同様に同居経験による有意差はなかった。

同居経験がない学生は、認知症高齢者との関わりにより「マイナスなイメージだと思っていたが、明るく接してくださる方が多かった」「ライフヒストリーに差がある」「実習で会話してみて会話が可能である」など学んでいた。このことから認知症高齢者と関わることで相手の個別性を理解し、生活歴の違いなども学んでいた。そのことから、３年過程の研究において、３年次の実習が認知症高齢者に対するイメージに影響される要因となっていた（田中ら，2005）。そして、学生は「高齢者の方に優しく根気よく諦めずにアプローチすることで呼びかけに対応してくれた」ということから、高齢者の方と優しく接し、人と人の関わりの大切さも学ぶことができていたと考える。このことは、認知症高齢者との関わりが少ない学生にとって臨地実習で認知症高齢者と関わることでの成果であったと考えられる。

老年看護学臨地実習終了後の認知症高齢者への変化について３割強（33％）の学生は、「イメージの変化がなかった」と回答していた。その要因は、同居経験がある学生の記述から「近所や祖母が認知症であったためにイメージの変化がなかった」とあり、臨地実習前から認知症高齢者とのかかわりがあり、現実を知っていることからの変化がなかったと捉えたと考えられる。

臨地実習を担当する教員は、臨地実習で学生に対して認知症高齢者への対応方法などを経験できるように支援をすることが大切である。そして学生のレディネスと生活経験にそった具体的な方法で支援する必要があると考えられる。

４．本研究の限界と課題

研究の限界について老年看護学実習前後における認知症高齢者のイメージの変化を検証するにあたり、研究参加者の数が少なく、一般化することが難しいため、更なる調査の必要があると考える。この研究は、実習における学生の学びの貴重な経験であり、今後、老年看護学実習の中でも認知症高齢者の指導に生かしていきたい。

表５　臨地実習開始前の認知症高齢者のイメージ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	数
観察できる現状	物忘れ（20）	①すぐに忘れてしまう。	10
		②やったことの記憶がなくなる。	1
		③記憶がないことが多い。	1
		④何日も合わないと相手が誰かわからなくなる。	1
		⑤人の話にあまり耳をかさない。	1
		⑥私の祖母は、孫の顔を忘れていたので、人の顔を覚えることが難しい。	1
		⑦今どこにいるのか、誰なのかわからない。	1
		⑧短期記憶が全くできない。	1
		⑨中核症状が顕著に表れる。	1
		⑩ご飯を食べていても「食べていない」という。	1
		⑪最近の出来事など新しいことを記憶するのが難しい。	1
	徘徊（9）	①徘徊などをしている。	6
		②夜間徘徊。	2
		③家からいなくなる。	1
	繰り返し（21）	①同じことを繰り返す	19
		②何度も同じことを言う	1
		③過去とことばかり繰り返し話す	1
	困難なコミュニケーション（18）	①コミュニケーションがとりずらい。	3
		②元気がない。	2
		③コミュニケーションをとっても同じ言葉を発したりつじつまの合わない会話になる。	2
		④話が通じなく会話を行うことができない。	2
		⑤かかわりずらい。	1
		⑥話のつじつまが合わない。	1
		⑦物忘れがひどくかかわりにくい。	1
		⑧情緒不安定でコミュニケーションをとるのが難しい。	1
		⑨言っていることが理解できない。	1
		⑩話が続かなくコミュニケーションがとりにくい。	1
		⑪しゃべることが少ない。	1
		⑫会話に脈絡がなく、意味が分からない。	1
		⑬口数が少なく、ボーとしている。	1
家族介護	家族の介護負担（3）	①家族の介護が大変。	1
		②介護が大変。	1
		③介護や看護をするのは大変。家族は気が気でない。	1
精神的不安定	行動（6）	①意味不明な行動をしたりしている。	2
		②腕など強く引っ張って暴れている。	1
		③思い通りにいかないときや否定されると怒る。気分の上下が激しい。	1
		④部屋をうろうろ歩いたり、話しかけてもしっかりとした返答が返ってこない。	1
		⑤理解ができずダメなことも行動してしまう。	1
	症状（18）	①怒りやすい	4
		②食事を摂取しても忘れているなど記憶力が低下している。	2
		③短気	2
		④大きな声で誰かを呼ぶ。	1
		⑤同じものを買ってきたり柄の違う靴下をはくイメージ	1
		⑥暴力がある。	1
		⑦症状が強くて接することが難しい。	1
		⑧引きこもりがち	1
		⑨ケアを行い介入しずらいイメージ	1
		⑩おどおどしている。	1
		⑪情緒不安定	1
		⑫少し怖い	1
		⑬今までできていたことができなくなっていく。	1

表６　臨地実習開始後の認知症高齢者のイメージの記述項目

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	同居経験有無
認知症高齢者へのイメージの変化があった	個別性（16）	①認知症の方でも一人一人違う。	あり
		②明るい人もいる。	あり
		③話しかけてくださる人もいて認知症だと言われないとわからない人もいた。	あり
		④コミュニケーションをとることでその方のリハビリにもなることを知った。	あり
		⑤よく話す方もいれば、口数が少ない方もいる。	あり
		⑥認知症の症状は、一人一人様々で関わってくれて覚えてくれることもわかった。自分がどれだけ関わるかで患者さんが変わる	あり
		⑦話してみると利用者なりの世界観を持っていてその中でどのような生活を送ってきたのか、どういう思いだったのか、自分なりのしっかりとした考えを持って生活していると感じた。	あり
		⑧関わってみて利用者なりの考えをもち、全ての行動にしっかりとした意味があることがわかった。	あり
		⑨認知症の程度にも段階が有り、全ての人が認知症特有の症状が出るわけでないと思った。	あり
		⑩人との関わりを楽しんでいる人も中にはいた。	あり
		⑪あの人は嫌だという感じにトラブルにまで発展することもあった。	あり
		⑫認知症でもライフヒストリーに差がある。	なし
		⑬一人一人違う症状がある。	なし
		⑭自分の思いをしっかり持っている。見当識が日によって差がある。	なし
		⑮マイナスなイメージだと思っていたが、明るく接してくれる方が多かったため関わりやすいと思った。	なし
		⑯できることもたくさんある。人によって様々である。	なし
	記憶の変化（4）	①昔のことは良く覚えているため昔の話をすると楽しそうに会話ができることが学べた。	あり
		②思い出に残っている話を繰り返しする。はっきり記憶していることがある（結婚年齢など）	なし
		③優しく根気よく諦めずアプローチするときちんと呼びかけに対して反応してくれる。	なし
		④声かけや促しを行うことで、自力でセルフケアを行うことが可能となる。	なし
	可能な会話（13）	①話しかけても返事がないのは答えないのもあるが、聞き方を変えるだけで良く話してくれるようになり、アプローチの仕方を少し変えるだけで様々な話をすることができた。	あり
		②情緒不安定なイメージがあったが、そのようなことはなく普通にコミュニケーションがとれ明るい感じだった。	あり
		③最初は関わりにくいイメージが強かったが、会話をしてみると普通に会話もできることがわかった。	あり
		④普段は病院や施設での集団生活を送れていた。	あり
		⑤普通に会話ができる人もいる。なにか目的を持っている。又しっかりと会話しようとすると話すこともできる。	あり
		⑥コミュニケーションがとれ何回か同じことを聞くが会話が成り立つ。昔のことを覚えておりそこから会話を広げることができることを知った。	あり
		⑦会話はできることがわかった。比較的おだやかに暮らしている（怒っているわけでない）	あり
		⑧コミュニケーションをとることで心を開いてくれ会話をしてくれることが増えた。	あり
		⑨実習に行く前は同じ話を何度もするイメージがあったため、ずっと話しているイメージがあった。しかし受け持ち利用者は、認知症が進んでいるため自分から話すことは少なかった。	なし
		⑩認知症は、進行と共に会話の量も減ることを改めて感じた。	なし
		⑪成立する会話を行うことができた。	なし
		⑫同じ認知症でも程度に差があり、コミュニケーションも個人差がある。	なし
		⑬実習で会話してみて会話は難しいこともあるが、会話ができる。	なし

	認知症の理解（13）	①実習で毎日顔を合わすこととたまにしか顔を合わさない場合と差があることがわかった。	あり
		②毎日関わることで変化がわかった。	あり
		③ただ怒りっぽいだけでなくきちんと説明すると納得していたいただけることもわかった。	あり
		④認知が、重度の方は食事も食事とわからないということを知った。	あり
		⑤認知症の方は程度に差があり、暴力的な人もいるがそうでない人もいる。	あり
		⑥症状が幅広い。ただの物忘れと違う。	あり
		⑦本当に物事を認識できない人がいた。	あり
		⑧日常生活動作に影響が出てくる。	あり
		⑨環境や伝え方が変わると思い出し、伝わる（理解できる）こともあることがわかった。	あり
		⑩症状の出現がない認知症の高齢者の方は、認知症のない高齢者とかわらない。	あり
		⑪日によって調子が違う。笑顔が多い。	あり
		⑫接していれば名前や顔など覚えていてくれる。思っていたよりも忘れない。	なし
		⑬叫んでいる人がいなかった。普通の人もいる。こだわりが強い人がいる。	なし
認知症高齢者へのイメージの変化がなかった	変化がない（3）	①近所や祖母が認知症であったためにイメージの変化はなかった。	あり
		②家で認知症の人と接しているためイメージは変わらなかった。	あり
		③実習を通して大声をだされたりすることがあり、イメージは変わらなかった。	なし
	症状の気づき（6）	①せん妄などの症状が著名に出ている人ばかりだと思っていたがそこまでいなかった。	あり
		②言ったことは、すぐ忘れてしまうものの、根気よく関わっていくと少しずつ覚えてくれる。	なし
		③認知症と診断が付いても今日の予定やご飯の内容など覚えており、しっかりしているように見える方もいる。	なし
		④認知症の症状は進行具合で違っていた。	なし
		⑤会話の中で少し前の記憶がなく何度も同じことを繰り返していた。	なし
		⑥自分は認知症であるという自覚がなく普通の感覚で暮らしていることがわかった。	なし

謝　辞

本研究にあたりご協力していただいたＡ大学３年生、臨地実習施設の実習指導者の方々、論文掲載にあたりご指導いただいた中部学院大学三上章允教授には心から感謝を申し上げます。

文　献

藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子，『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果（第２報），山梨県立大学看護学部紀要，10，93-101，2008.

藤原李圭・蓬 詩織・鈴木千絵子，認知症高齢者の中核症状に対するイメージとBPSDへの対応知識および困難感について－看護学生のアンケートから－，関西福祉大学研究紀要，21，1-11，2018.

橋本智恵・小泉由美・岩本洋子・平松知子，（2017）認知症高齢者の理解とコミュニケーション技術習得のための体験演習における看護学生の学び，認知症ケア学会誌，15(4)：848-856，2017.

平成28年版高齢者白書，内閣府，2016.

木下香織，「認知症の高齢者のケア」授業前後における看護学生の認知症の高齢者イメージの変化，新見公立大学紀要，37，35-40，2016.

厚生労働統計協会，国民の福祉と介護の動向，65（10），1022，2018.

草地潤子・千葉京子，老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，20，15-24，2007.

松村明，大辞泉，小学館，186，1995.

中澤明美・山下菜穂子・山田ノリ子，高齢者施設実習において、看護学生が捉えた認知症高齢者との関わり場面から得た学び，了徳寺大学研究紀要，12，117-126，2018.

新村出，広辞苑第６版，岩波書店，200，2008.

炭多雄人・大久保幸子・河村沙織・妹尾眞梨菜・鈴木千絵子，認知症高齢者のBPSD（行動心理学的症候）のイメージに関する研究－看護学生のアンケートから－，関西福祉大学研究紀要，20，83-90，2017.

高橋順子・山本道代・林裕子，観察強化プログラムを用いた老年看護学実習への効果，天使大学紀要，17(1)，1-11，2016.

田中敦子・鳴海喜代子，認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査，埼玉県立大学紀要，7，59-66，2005.